とする所の思想は當時通行の神道說にして他奇なしと雖も書紀の末疏にして當時の撰になれるもの前に釋日本紀神代口決あり稍後れて日本紀纂疏あるのみなれば稀覯の書たるを失はず殊に淨土門流に此の著あるは頗る注目に値す本書を以つて聖問の著とするは第三卷の奥書に「了譽三卷私鈔」云々の語あるの外直接の證據なしと雖も聖問に別に古今集序註の著ありて國典に造詣深きを示し又麗氣記抄、破邪顯正義を著はして神道を說けるものありといへば必ずしも疑ふべきにあらずたゞ專修念佛の敎義が斯の如き雜修を如何に會通せんとしたりしかは極めて興味ある問題なるべし高瀨氏の解題及び傳記はよく委曲を盡せるを多とすると共に此の點に就いて詳細なる解說を缺きしを遺憾とす（明治聖德紀念學會發行、價三、五〇）

●上代國文學の研究

武田祐吉著

著者は多年東京帝國大學に於いて萬葉集の校勘に從事し傍ら專ら假名文字發達以前の國文學の研究に沒頭せる人にして本書は卽ち其の平素の蘊蓄を披瀝せるものなり編を第一上代の文化と說話文學第二歌謠と漢文學第三資料の解說第四萬葉集の撰定に關する研究の四に分ち第一編には主として文學上より上代の文化を論じ第二編には紀記の歌謠及び其形式を說き萬葉歌人を品隲し又漢詩文及び小說を述べ第三編には上代の文學書の詳細なる解說を與へたり而して第四編は卽ち萬葉集の本典研究にして著書自ら序文に「第四編に極なき愛著の念を覺える」といへるが加く最も其の力を致せし所にして從つて又最も多く傾聽すべき研究に富めり就中萬葉集撰者の問題については近時殆ど定說の如くなれる大伴家持說を貶け眞淵と同じく集中に新古の兩部分あるべきを說き又東歌が東方の國風にあらざるを論じたるが如き特に衆目を引くに足るものなり卷頭の上代文化を論じたる編の加きも亦吾人をして多大の興趣を覺えしむるもの尠からず津田氏和辻氏等の研究と併せて今や古代の文學研究に新しき機運の動きつゝあるを感じ得て愉快禁じ能はざるものあり（博文館發行、價二、三〇）〔以上岩橋〕

●日本經濟史原論

本庄榮治郎著

日本經濟史の研究今なほ草創の狀態にあるは其學問の立場研究方法の不備及び研究材料の不整頓に基因する事多かるべし本書は其等の缺陷を滿さんがために編纂せられたるものにして第一章に於ては經濟史と他學科との關係を說き經濟史と歷史の經濟的說明の差異等を明かにし日本經濟史とは要するに我國に於ける經濟事實の史的研究なれども其の窮極の目的は經濟發展の一大理法の發見にありとし、第二章にありては日本經濟史研究の發達を略述し第三章に於て其の研究の必要を高稱し第四章に於ては其研究の往時に比して極めて容易になれるを指摘し第五章には日本經濟史研究の方法を說き第六章には日本經濟史研究の材料を擧ぐ最後は著者の最も努力せる部分にして頁を費す事實に約二百七十に及べり第一部總覽は書目索引解題に分ち、第二部資料は普通參考書、材料集、叢書論集に分ち、第三部論著は舊時の論著及び維前後の論著洋書一班に分ち更に種類によりて細分し。日本經濟史研究の材料を或は解題し或は內容一班を示して過去に於ける關係論著は勿論史籍日記史料等を網羅したるものにして丁寧親切を極め最後に附せる書名索引と共に斯學入門者は勿論一般史家のためにも非常に便宜を與ふるものなるべし菊版四七八頁、外に索引六〇頁、（內外出版株式會社發行、價、四五〇）〔中村〕

● W. H. Mackean, Chistian Monasticism in Egypt to the close of the Fourth Century. (London, 1920)

本書は百五十餘頁に過ぎざる小冊子なれども從來類書殆ど絕無とも云ふべき埃及に於ける基督敎修道生活の起原を說きしものなれば此方面の研究者にとりては有益なる著述たるを失はず先づ基督敎徒以外の諸邦民間に於ける宗敎生活に現れたる遁世思想を一瞥してその基敎修道生活に及ぼせる影響如何を觀それより埃及の地に發生せるモナスチシズムの起原 Eremites, Cenobites 二派の生活樣式修道僧の性質面目を說き最後に其流風の傳播弘布せる經路を概述し居れり著者は相當に關係史料を涉獵し居れるやうなれども記述は簡易を旨としたれば學術的價値は元より低きを免がれず嘗て本誌上に紹介せるウークマン氏の好著「修道思想の進化」と相俟つてモナスチシズム研究に入らんとするもの、好指針たるを得ん